

狩野一男の生の深淵

斎藤 美衣

—ユーモアから広がる世界—

ユーモアの語源は、ヒューマン（人）であると聞いたことがある。なるほど、ユーモアは場を和ませ、笑いを誘う。緊張をほぐし、人と人との距離を縮める。そのありようが人間の根幹であるというのはいかならずける。

短歌は、人生の出来事を情感こめてうたい、花鳥風月をみやびやかにうたうだけでなく、日常の些事をユーモラスにうたった作品も数多くある。ユーモアの短歌、と聞いて思い浮かべる歌人の一人に狩野一男がいる。ここでは狩野一男の短歌を、安立スハル、大松達知の歌と合わせて読み解き、ユーモアの歌世界から垣間見える生の深淵に近づいてみる。

■身体に響くユーモア■

言葉は意味が与えられた記号だが、記号の前にそれは音楽である。言葉の持つリズム、響き、ハーモニーは、短歌でも韻律と呼ばれ大切にされている。意味を捉える前に、そのリズムを口の中で転がしているうちに内部から湧き上がる身体的な喜びや、楽しさがある。

ぬーぼーと闇に休める起重機を見つつきた

れば鉄の匂ひす 狩野一男『生きにゆく』

初句の「ぬーぼー」の音と表記が印象的だ。広辞苑で引

てみると、「ぬーぼー（ヌーボー）」とは「ぬうっと」「ぼうっと」に掛けていう人の態度などのつかみどころのない様とある。確かに大きな車体が動かず停まっている様子は、つかみどころがないように見える。ひらがなの表記とのつべりした音の伸びる感じがなんとも楽しい。

窓はまたインテリアでありエクステリアであり どちらでもない 『栗原』

狩野一男の歌には、外来語の響きを楽しむものが多い。カタカナの角張った音と、「リア」のリフレインが印象的だ。音の楽しさから一首に入ると、そこから歌の深部に引き込まれる。窓というものが内側のものなのか、外側のものなのか。音の面白さ、結句の「どちらかでもない」に思わず笑いながら、そこから叙景や現代社会に向けた深い視点へ移っていく。

長生きをするといふのは知る人がどしどし 死んでゆくといふこと

安立スハル『この梅生ずべし』以後

会ひすぎるといふほど会ひしかどしだいたい

会はずなりいまはまつたく会はず

『この梅生ずべし』

安立作品は、外来語やオノマトペによる面白さの効果ではなく、平易な単語が力を持って響き、ねじれた使われ方により読み手に深い印象を与える。「どしどし」がそれぞれ「死ぬ」というネガティブな言葉にかかっている。「どしどし」や「会ふ」のリフレインが不思議な生命力を感じさせる。

チエアパースン・ポリスオフィサー・フア
イアフアイター・パースンホール・アンパ
ンパースン

大松達知『フリカタイプ』

ミスマッチ・モラルハザード・グローパー
ル・コラボレーション・ケーススタディ

狩野一男『栗原』

これらの作品は、一首すべてが外来語のみで構成されている。カタカナ表記と音のカクカクした硬い感じは、つい声に出して読みたくなる。声に出してみながら読者はこれらの単語が単なる音数や音の面白さだけで選ばれていないことに気づく。

大松の歌では、ジェンダー意識の変化により、これまでは「マン」が使われていた言葉が、徐々に性別を意識させない「パースン」を使うようになってきたことを指摘する。この歌のユニークさは、結句に行くに従って未来にはこの言葉の「マン」も社会的に許されなくなっていくかもしれないという作者の視点を感じられるところだ。狩野の歌で使われている外来語は、初句以外は長音が含まれた単語で構成されている。この歌が収録されている『栗原』では、五十代半ばに突然タモ膜下出血に襲われ、死の淵より生還した経験がうたわ

れている。このことから、結句の「ケーススタディ」は医療現場での事例研究と読むこともできる。日常生活、仕事、医療の場面でも耳にするようになったこれらの外来語は、いちを扱う場面、日常の営みの中にそぐわないことがある。初句の「ミスマッチ」は、それに続く四つの単語に対する疑問を投げかけているように感じる。

■自分をおかしがる■

かつこよくて立派な人でいたい気持ちは万人にあるだろうが、詩歌の中に立派な人ばかり出てきたら読んでいてつまらない。心が渴いている時に沁みるのは、読み手に近づいてきてくれるさほど立派でない人だ。

自分のためなところを描くのは案外難しい。なんてだめなのだろうと悲観的になりすぎると、読み手は作品に近づき難くなる。気持ちと作品の視点が重なりすぎず、程よい距離感があると、そこに客観性とユーモアが生まれる。

疲れやすきわが中年は歩み来て薄日溜りに
猫のごと寄る

狩野一男『インフォームド・コンセント』

中年は拠るべない年代だ。誰も守っても労つてもくれない。だが大人の顔の下にも、青年と変わらないやわらかな心がある。この歌では徹底した客観性で一首が作られている。一定の距離を保って他人を観察するように自分を描写している。自分の弱い部分を、読み手にそっと明かしてくれる。

風邪の身は昼ごろ起きて世の中を少し離れ
た思考してをり

『栗原』

これも自分を客観的に捉えている。「風邪ひいて」でも、「風邪のわれ」でもなく「風邪の身は」としていることで、他人のこのように、自分の身体であつても自分のものではないような不思議な感覚にとられる。「世の中を少し離れた思考し」ている自分をさらに離れたところから見ているもう一人の自分がある。

病むわれがたまたま悪態をつくときに生きてゐる感じが鋭く顕ち来る

安立スハル『この梅生ずべし』

安立スハルのこの歌も、自分自身から距離を置いて見ている。自分のネガティブな部分を曝け出して「悪態をつく」と思い切つて言い切る。そしてそのネガティブの極みにいる時、「生きてゐる感じが鋭く顕ち来る」という。道徳的でどこに出しても恥ずかしくない自分とは言えない時の方が、本来の人間らしさ、なまなまと生きてゐる感じがすると一歩引いてみているところが、先の狩野一男の歌と共通する。

■世界を新たに捉え直す■

メガネ屋の店員はみなメガネ掛け本当は嘘、のやうな目をせり

狩野一男『インフォームド・コンセント』

電柱に落書きされし「かのう」といふ字がなんとなく日に日に育つ

『栗原』

ユーモアは、世界のよい面をとらえ、広い視座を支え、生きる活力になる。ある人にとつてはなんの変哲もないつまらない風景が、ユーモアを伴つた目で見ることで全く違った景

色になつてくる。ユーモアを持つことは、人に与えられた最大の自由だろう。

狩野一男の二首。一首目は、言われてみるとそうかもしれないと思わされる。中には視力の良い人もいるだろうが、メガネ屋の店員はだいたいメガネを掛けている。「本当は嘘」とあえて言うことで、この世界そのものの不確かさも呼び出しているようだ。二首目、自分の名前と同じ「かのう」という文字が電柱に書かれている。見るたびに少しずつそれが育つてきているように見えるという視点が独特だ。自分の分身のような落書きの「かのう」の文字と、それを見ている自分が今同時に生きて変化しているような面白さがある。

蚊が一つ六十六歳の血を吸ひて机の下の闇に消えゆく

安立スハル『この梅生ずべし』以後

言わなくても特に支障ないことをあえて言うことで、新たに広がる世界がある。蚊が「一つ」であること、刺された人が「六十六歳」であることを改めていうことで、闇の抱える質感、机の輪郭などのありきたりの風景がシユールに、面白く見えてくる。この歌からは生と死の両方を感じられる。普段の会話や散文ではあえて言わない情報を入れてうたうことで、味わいとユーモアが出てくる。そしてそのユーモアはおかしさのみに留まらず、生と死の静謐さも感じさせる。

どんぶりを洗ひ終へればどんぶりにかぶせたり交尾させるにも似て

大松達知『スクールナイト』

ノー・ウンチ、ノー・ライフ、ああ、この

先の百年をウンチせよかし、おまへ

『ゆりかごのうた』

大松の歌でも、日常を丁寧に捉え直すことでユーモアが生まれ、世界の異なる見え方を表現する歌がたくさんある。例えば一首目の食器洗いの歌。どんぶりが一つではなく、二つ以上の時、伏せた状態で上に被せる。その様を交尾させるととらえたところにおかしみがある。

『ゆりかごのうた』では、子育ての歌が多く、このウンチの歌もその一つ。上の句の「ノー・ウンチ、ノー・ライフ」に笑ってしまうが、それに続く「ああ、この先の百年をウンチせよかし、おまへ」の大袈裟な言葉遣いから、これは全身全霊での祝福の歌なのだとわかる。排泄も含めて一人の存在を全て肯定する歌は、ユーモアに端を発して、生へのあたたかな確かな手触りを伝える。

身体的な音の響きからの面白さ、自分を客観的に捉える視点、角度を変えることで世界の楽しさ、生きている喜びを広げる。ここまで三人の歌人の作品からユーモアからどのような世界が広がっていくかを見てきた。改めて感じるのは、ユーモアとは人間の中心に迫り、生に直結するものであるということだ。ただの諧謔ではなく、狩野一男、そして安立スハル、大松達知らの歌は、そこに命へのあたたかな眼差し、畏敬、祝福が感じられる。それと同時に仄かな死をも感じさせる。それは生が死をも含んだ存在であるからだろう。

かなしくて仕方なければわらふなり悔みの言葉
言葉いただきながら 狩野一男『生きにゆく』

咲きましたさくらの花が咲きました生きよ
生きたき者よ生きよと 『悲しい滝』

この蒲団で一緒に寝てくれと言ふ母を臭気
もろとも抱きしめたり

安立スハル『この梅生ずべし』以後
目つむりておまへを思ふ地下鉄の濃霧の音
を聞き分けながら 大松達知『ぶどうのことは』

喜劇王チャーリー・チャップリンは、「人生はクローズアップで見れば悲劇だが、ロングショットで見れば喜劇だ」と言っている。笑いと涙は真逆のものでなく、実は同じもの捉え方、切り取りかたによる違いなのだ。一九九一年に発行された「棧橋」二十八号に座談会「笑いを楽しむ」がある。この中で、狩野一男は次のように発言している。

狩野一男「野口さんの歌って、笑ってても、気づいたら、この辺から涙が出てたってことありますね」

野口清子「それはほら、生まれた時は誰でも魂っていうのが心っていうのが光ってて明るいもんだと思うんですけど、生きてくうちに悲しみが積もって来るといふか取り付いてくんのよね」

ユーモア、笑いは、人のあらゆる感情を横断し、生きていくことそのものにつながるものだ。生、死を見つめること、深く感じようとする態度が狩野一男のユーモアの歌の底にある。あらゆる角度から自分と世界を捉える自在さ、自由さが一人の生の営みに通じる。狩野一男のこれからのユーモアと生がどんな深淵に到達するのか楽しみだ。